花園大学文学部研究紀要　第五六号　二〇二四年三月　抜刷

『為頼集』の伝本・追考補遺

曽根誠一

『為頼集』の伝本・追考補遺

曽根誠一

はじめに

かつて、筑紫平安文学会著『為頼集全釈』[1]（以下、『全釈』と略称する）が刊行された折、「『為頼集』の伝本」を担当し執筆した。その後、四半世紀余りを経た先年、田中教忠氏旧蔵本を入手したことを契機として、『全釈』刊行時には言及できなかった冷泉家時雨亭文庫本（零本、古筆切を含む）・山本家本（賀茂季鷹旧蔵本）も含めた本文異同について、「『為頼集』の伝本・追考」[2]（以下、前稿と称す）をものしたのだが、その折、冷泉家本から切り出された53～56番歌（松井家蔵『手鑑』切）と、72～74番歌（『古筆学大成』第30巻[3]「補遺図版」117）を確認し損ねて、検討を加えることができなかった。

今回、これらの古筆切の本文を確認したことに加えて、京都女子大学図書館の所蔵に帰した谷山茂氏本（岩崎美隆旧蔵本）の本文を、調査することができたので、その結果を報告してみたいと思う。これで、現在確認し得ている伝本及び古筆切に関しては、全て言及し得たことになる。

一

先ず、鎌倉中期の真観（藤原光俊）書写にかかる冷泉家本（この系統を真観本系統と称する）から切り出された断簡の本文に、検討を加えてみたい。

松井家蔵『手鑑』の古筆切53～56番歌と、『古筆学大成』第30巻「補遺図版」掲載72～74番歌の本文異同は、次の通りである。

尚、上段は、冷泉家時雨亭文庫本（以下、冷泉本と略称する）の断簡本文、下段は、傍線部に対応する江戸期の転写本である宮内庁書陵部本（以下、書陵部本と略称する）本文。その後の「＊」には、伝甘露寺資経筆の古筆切と同系統の本文を有する三手文庫本（以下、三手本と略称する）・『全釈』未掲載の山本家本（以下、山本本と略称する）・架蔵本（以上の3伝本を、資経本系統と称する）と、今回調査し得た京都女子大学蔵谷山文庫本（岩崎美隆が群書類従本に依って校訂したミセケチ・傍記は採らない。以下、京女本と略称する）の、傍線部に対応する本文を掲示した。

①55番歌詞書「かへりに」―は　＊へ（三手本・山本本・架蔵本／京女本）

②56番歌詞書「五月のすゑにさくらのすゑもみちたるにつけて」―×××／□（空白）　＊のすゑ（三手本・架蔵本／京女本）の末（山本本）　＊ち（三手本・山本本・架蔵本）／に（京女本）

③56番歌第三句「あきこしを」―ゝ　＊こ（三手本・山本本・架蔵本／京女本）

④72番歌詞書「せんねう殿」―ね　＊よ（三手本・山本本・架蔵本／京女本）

⑤72番歌詞書「みふのめのとのもとより」―××　＊めの（三手本・山本本・架蔵本／京女本）

⑥72番歌第二句「ねさめつゝめや」―ゝそ　＊らめ（三手本・山本本・架蔵本／京女本）

⑦72番歌第五句「おもひあかすを」―は　＊を（三手本・山本本・架蔵本／京女本）

⑧74番歌詞書「もちゐをこせたれは」―おこ　＊をみ（三手本・架蔵本／京女本）を見（山本本）

以上の9例（②は2箇所の異同あり）について、順次検討すると、①「かへり」は、「へ（β）」の右側部分が、続く「り（利）」との連綿の関係で短縮されたため、書陵部本は「ハ」と誤読し、字母を「者」に変えて書写したものである。資経本系統諸本と京女本も「へ」とあり、書陵部本の独自異文である。

②「五月のすゑに」の「のすゑ」は、ミセケチになっており、書陵部本はそれに従って、本文を脱落させたものである。その理由は、直後に「さくらのすゑ」とあり、「すゑ」の同語反復を避けたためであろう。だが、資経本系統諸本と京女本には、「のすゑ」がある一方で、「さくらの」の直後の「すゑ」を欠いている。冷泉本と資経本系統諸本・京女本が一致する「五月のすゑ」は本来存し、「さくらのすゑ」は同語反復であり、紅葉する箇所を限定せずとも文意が通ることから、資経本系統諸本と京女本では省略されたのであろう。

また、「もみちたる」は、冷泉本の「ち（知）」が判読しがたかったために、一字分空白にしたのであろうが、字形通りに模写して「マヽ」と傍記するのが一般的であり、珍しい事例である。資経本系統諸本には「ち」とあり、文意も通るので、書陵部本の独自欠字である。京女本の「に」（岩崎美隆は、群書類従本に依って「に」をミセケチにし、「ち羊」と傍記する）は、文意が通らず誤写であろう。

③「あきこし」は、「こ（已）」の変体仮名を、書陵部本が踊り字の「ゝ」に誤読した事例である。資経本系統諸本と京女本にも「こ」とあり、書陵部本の独自異文である。

④「せんねう殿」は、「宣耀殿」の連声表記である「ねう」と記す冷泉本・書陵部本の真観本系統と、本来は「えう」と表記すべきところを、発音に即して「よう」と記す資経本系統諸本と京女本との、表記の相違である。

⑤「みふのめのと」の「めの」は、書陵部本だけが欠脱していて、資経本系統諸本と京女本にも「めの」があり、文意「民部の乳母」からしても、存するのが本来の本文であろう。書陵部本は、「みふのめのとの」の近接同字の「の」の目移りで脱字した、独自欠字であろう。

⑥「ねさめつゝめや」の「つゝめ」は、理解しにくい表現であるために、書陵部本は、「め（女）」と字形の類似した「そ（曽）」の誤写と考えて、「つゝそ」と意改したのであろう。冷泉本の踊り字「ゝ」は、「ら（良）」とも判読できそうな字形で書写されているし、資経本系統諸本と京女本には「つらめ」とあり、歌意も通るので、これが本来の本文であると判断される。

⑦「あかすを」は、平安期に使用されて鎌倉期以降には馴染みのない間投助詞「を」の字母「乎」を、江戸期の転写本である書陵部本は、字形の類似した「は（半）」と誤読したものである。資経本系統諸本と京女本にも「を（遠）」とあるので、書陵部本の独自異文である。

⑧「もちゐをこせ」は、書陵部本も「おこ」と表記していて、文字の相違はあるものの、文意は同一である。だが、資経本系統諸本と京女本には、「をみせ」とあり、文意が相違している。「むまごのいたゞきもちゐ」とは、為頼の孫の「幼児の頭に餅を戴かせてその前途を祝う言葉を述べた儀式」（全釈・222頁）で使用される餅のことで、真観本系統では、それを孫の親が「をこせ」（送っ）てきたことになり、資経本系統と京女本では、その場乃至後で「みせ」たことになる。孫の順調な成長を祈念する儀式で使用する餅であり、何れの解釈も成立し得て、判然としない。資経本系統諸本の「み（美・見）」及び京女本の「み（美）」は、その字母が元来は「ミ」であったとすれば、冷泉本の「こ（コ）」と字形の類似から誤写が生じたものと考えられる。何れが原態本文なのか、俄に判断しがたいが、「ミ」が「こ」に誤写される可能性の方が高く、その逆の場合は、思い込みによる誤写となろう。一般論として、誤写は、納まりのよいこなれた表現に改変されることが多いことを考えると、「をみせ」が原態なのであろうか。

以上の検討結果をまとめると、次のようになろう。

書陵部本の独自異文の事例は、6例あり、誤読による誤写3例（①③⑦）、判読に迷っての空白1例（②「ち（知）」）、目移りによる脱字1例（⑤）、歌意による意改1例（⑥）となり、既に前稿で指摘したことなのだが、書陵部本の書写態度は、丁寧とはいいがたいものなのである。[4]

尚、今回、切り出されて古筆切として伝存している53～56番歌と72～74番歌の7首について、江戸期転写本の書陵部本との異同を検討した結果、前稿と合わせて全86首中の49首（57％）について、実態を解明することができたことになる。更なる古筆切の発見・報告を、待ちたいと思う。

また、真観本系統の冷泉本と書陵部本本文が一致しながら、資経本系統諸本と京女本とは相違する事例は、3例あり、冷泉

本のミセケチによる意改1例（②「のすゑ」）、表記の異同1例（④「ねう」）となっており、何れとも決しがたい1例（⑧「をこせ」と「をみせ」）となっている。

右の9例の検討結果を踏まえると、京女本の本文は、②「もみに」を除いて資経本系統諸本と一致しており、この系統の伝本である可能性が高いようである。

ついては、次節で、京女子本の本文について検討を加えることで、このことを確認してみたいと思う。

二

京都女子大学蔵谷山文庫本の書誌については、『京都女子大学図書館蔵　谷山文庫目録』[5]に、次のように記されている。

為頼朝臣集　写本　一冊　090・Ta88・473
二七・四×一八・八糎　二〇丁
［外題］為頼集
［内題］ナシ
［奥書等］ナシ
［蔵書印］1（曽根注＝①「谷山／蔵書」167頁）
※473為頼朝臣集・475相模集ト同装・同題箋。相模集トハ本文モ同筆（49頁）

この京女本は、江戸後期の岩崎美隆旧蔵本であり、美隆旧蔵家集を網羅的に調査した蔵中さやか氏[6]が、次のように述べておられる。

○為頼集（○九○・Ta八八・四七三）二七・四×一八・七cm
外題　為頼集　内題　ナシ　墨付　二〇丁　遊紙
前後ともナシ　朱押紙、集付（拾遺・後拾・千載・新古・続後）アリ　本文と同筆の書き入れと、美隆による「羊」（「群」の略字）を付す書き入れ及び頭書アリ
総歌数　八四首　奥書等　ナシ

冒頭から三詞書途中まで（半丁一面分か）の本文を欠くが、「羊（群）書類従左ノゴトシ」として内題以後の欠脱部分を美隆筆で補う。補筆の二首を除くと全八四首。現存諸本は同一系統で伝本数は少ない。資経本と同系統である三手文庫本と字母、改行位置を含め一致することが多いが、二二、三二等に小異がある。真観本（零本）に一致する異同箇所もあり、注目すべき本文である。（109頁）

蔵中氏のご指摘は、具体例の提示がないので、その実態の確認も含めて、資経本系統の最善本と称され、京女本と同じく和歌が一首二行書きで、親本の書写形態を留めていると思しい三手本の異文を示し、山本本・架蔵本の異同も加えて、検討してみたいと思う。それによって、4伝本間の親疎関係も判明するからである。

京女本の三手本に対する異文は、24例確認され、この内、資経本系統の本来の本文を留めている事例としては、次の3例を指摘できよう（上段は、京女本本文・歌番号は86首本に依る。下段は、傍線部に対応する三手本本文。以下同じ）。

①10番歌詞書「文慶君のもとに」（2丁表6）―父（三手本・山本本・架蔵本）
②29番歌詞書「津のかみなりしとき」（6丁表4）―×（三手本・山本本）し（架蔵本）
③46番歌初句「まかりちる」（10丁表7）―ち（三手本・山本本）かり（架蔵本）

先ず、①は、大雲寺別当の「文慶」に贈った和歌の詞書であり、「文」が正しく、三手本を含めた資経本系統諸本は、字形の類似した「父」に誤写したものである。尚、冷泉本の切り出された断簡は、確認されていないが、書陵部本には「文慶」とあり、冷泉本も京女本と一致していたと考えて大過ないであろう。

②は、為頼が摂津守であった、正暦三年992から長徳三年997までの間の詠歌の詞書であり、「なりとき」（藤原師尹男の済時欤）に摂津守任官は確認できないので、過去の助動詞「し」があるのが、本来の本文であり、架蔵本も「し」を有している。三手本・山本本は、人名の「なりとき」に引かれたのか、「し」を欠脱している。尚、冷泉本・書陵部本にも「し」があり、京女本・架蔵本と一致している。

③は、架蔵本も「まかりちる」とあり、三手本・山本本は、「かり（可利）」を一文字の「ち（知）」に誤読したのであろう。冷泉本の切り出された断簡は、確認されていないが、書陵部本には「さかりちる」とある。「ま（万）」と「さ（左）」の変体仮名の字形は類似しており、祖本の本文は、「まかりちる」か「さかりちる」であったと推定される。何れにせよ、三手本の錯誤を遡求し得る本文であるといえよう。

以上の検討から、京女本が資経本本来の本文を留めていると判断される事例3例中、②③の2例で、架蔵本と本文が一致していることから、京女本と架蔵本は、親しい関係にあるといえよう。

また、蔵中氏が京女本を、「真観本（零本）に一致する異同箇所もあり、注目すべき本文である」と評されているが、三手本と相違しながら、真観書写の冷泉本と一致している本文は、②の1例が確認されるのみである。冷泉本の江戸期転写本である書陵部本の①③を加えても、3例にとどまり、架蔵本との一致状況を勘案する時、冷泉本との直接的な関わりは、考えなくてよいように思われる。

次に、京女本の誤写と判断される18例（⑧は2箇所）について、検討を加えてみたい。

④4番歌第二句「そらのなかは」（1丁表6）―つゆ（三手本・架蔵本）露（山本本）
⑤7番歌初句「おりくれは」（1丁裏6）―つ（三手本・山本本・架蔵本）
⑥24番歌詞書「もとめてよせとありしかは」（4丁裏7）―か（三手本・山本本・架蔵本）
⑦29番歌詞書「いへの庭とゝろこゝすの」（6丁表5）―こ（三手本・山本本・架蔵本）

⑧31番歌詞書「ひら|ひさいりたまへりしのち」（6丁裏3）—と（三手本・山本本・架蔵本）／ま（三手本・架蔵本）参（山本本）

⑨38番歌詞書「とをきところへゆくはら|にかはりて」（8丁表3）—、（三手本・架蔵本）母（山本本）

⑩40番歌第五句「妻かねかもら|し」（8丁裏6）—、（三手本・山本本）ら（架蔵本）

⑪48番歌詞書「いなりにまうてたりつ|る女のもとに」（10丁裏5）—け（三手本・山本本・架蔵本）

⑫50番歌第四句「見か（暦イ）（霞）ぬものゝ」（11丁表5）—え（要）（三手本・山本本・架蔵本）

⑬52番歌詞書「山ふきのおほ|ゝつれりけるを」（11丁裏3）—う（三手本・山本本・架蔵本）

⑭54番歌初句「草さ|くら」（12丁表4）—ま（三手本・山本本）枕（架蔵本）

⑮55番歌第三句「きてそみゆ|」（12丁表7）—みる（三手本）見×（山本本）みゆ（架蔵本）

⑯56番歌詞書「さくらのもみ|にたるにつけて」（12丁裏1）—ち（三手本・山本本・架蔵本）

⑰58番歌初句「にな|ひとの」（12丁裏8）—る（三手本・山本本・架蔵本）

⑱60番歌第五句「いかゝみゆ|らん」（13丁表8）—る（三手本・山本本）ゆ（架蔵本）

⑲67番歌詞書「中つかさの宮のはら|の女御」（15丁表2）—、（三手本・山本本・架蔵本）

⑳75番歌第四句「とみて|さつめる」（17丁表3）—く（三手本・架蔵本）て（山本本）

右の事例は、全て字形の類似による誤写であり、最多のものは、踊り字「ゝ」を「ら（良）」に誤写した⑨⑩⑲の3例である。その理由は、三手本でも踊り字の最後（字末）が払われていることから、京女本の親本の字形も同様であり、紛らわしかったためであろう。尚、⑩は、架蔵本も同じく誤写している。

次に多いのは、「ま（万）」を「さ（左）」に誤写した⑧⑭の2例であり、字形の類似に起因している。

同じく2例の誤写の事例として、「る（留）」を「ゆ（由）」に書写した⑮⑱があるのだが、字形の類似が原因なのであろう。ただ、架蔵本も、「ゆ（由）」と書写した上で、それをミセケチにして、「る（留）」と墨筆で傍記・訂正しており、前述した正統乃至錯誤を遡求し得る本文の②③の事例が、京女本と一致していたことを勘案すると、両本の親しさが窺われるように思われる。

その他の事例について言及すると、④は、「つゆ（川由）」の二文字を、一文字の「な（南）」に誤読したものであり、⑤は、「つ（川）」を直前の文字との連綿の関係で「く（久）」に誤読し、⑥は、「か（可）」を「よ（与）」に誤読したものである。

⑦は、「こ（己）」を踊り字の「ゝ」に誤読し、⑧は、「と（止）」

を「ら（良）」に誤読し、⑪は、「け（計）」を「つ（川）」に誤読し、⑫は、漢字の行書といってよい字形の「え（要）」を「か（霞）」に誤写したものである。

⑬は、「う（宇）」を踊り字の「〻」に誤読し、⑯は、「ち（知）」を「に（尓）」に誤読し、⑰は、「る（留）」を「な（奈）」に誤読したものである。⑳は、「く（久）」を「て（天）」に誤読したものであるが、山本本も「て」と誤読しているように、紛らわしい字形となっている。

また、脱字は、次の3例があるが、文意は通らず、個別の言及は不要であろう。

㉑11番歌第三句「×とのうちに」（2丁裏2）―や（三手本、山本本）宿（架蔵本）

㉒75番歌詞書「これはうち×みにとて」（17丁表1）―き（三手本・架蔵本）君（山本本）

㉓85番歌詞書「せんさいなとを×しきに」（19丁裏4）―か（三手本・山本本・架蔵本）

以上の検討結果から、京女本と架蔵本とは、正統な本文の事例②と、三手本の錯誤を遡求し得る事例③の2箇所が一致しており、本文的に親しい関係にあるといえるのだが、⑩⑮⑱を除く誤写と欠字は一致しておらず、直接の書承関係にはないと思われるのである。

三

次に、和歌の上欄に書き加えられた「集付」8例について、三手本・山本本・架蔵本と京女本の4伝本に、架蔵本に書き入れられた猪苗代兼宜本[7]も加えて、三手本本文を提示してまとめると、次のようになる。但し、兼宜本については、架蔵本への青筆による書き入れのため、朱墨の区別は不明であることを、お断りしておく。

①14番歌「後拾」（墨）（三手本・山本本・架蔵本・兼宜本／京女本）

②25番歌「拾哀 栄花（朱）みはてぬ夢（朱）」（三手本・山本本・兼宜本）

③26番歌「同（朱） 新古小町（墨）」（三手本・山本本）「新古小町」（墨）（架蔵本・兼宜本／京女本）

④31番歌「拾遺 後中書王」（墨）（三手本・山本本・架蔵本・兼宜本／京女本）

⑤65番歌「拾雑下」（朱）（三手本・山本本・兼宜本）

⑥76番歌「夫木」（墨）（三手本・山本本（朱）・兼宜本）

⑦78番歌「千載」（墨）（三手本・山本本（朱）・架蔵本・兼宜本／京女本）

⑧79番歌「続後」（墨）（三手本・山本本（朱）・架蔵本・兼宜本／京女本）

京女本を除く4伝本間の「集付」の異同については、前稿で、三手本に対して山本本は、その下位に位置すること、架蔵本に青筆で異同が書き入れられた兼宜本は、山本本に近い伝本であることを述べたので、京女本に限定して論じることにしたい。

京女本が他の4伝本と一致している事例としては、①「後拾」④「拾遺後中書王」⑦「千載」⑧「続後」の4例があり、山本本は⑦⑧を朱書するが、他の伝本は墨筆で一致している。山本本の錯誤である可能性が高いであろう（⑥も同様であろう）。

その一方で、朱筆の②「拾哀栄花みはてぬ夢」⑤「拾雑下」の「集付」は、三手本・山本本に加えて、朱墨不明の兼宜本だけであり、架蔵本と京女本には見られない。このことから、以上の5伝本は、三手本・山本本・兼宜本と架蔵本・京女本の二類に大別できることになろう。

この相違は、③の事例で更に明確になり、墨筆の「新古小町」は、5伝本全てで一致しながら、朱筆の「同」（栄花みはてぬ夢）については、三手本と山本本だけに見られ（兼宜本は、架蔵本への書き入れを見落とした可能性が高いように思われる）、架蔵本・京女本には見られないのである。

5伝本全てで一致している「集付」5例①③「新古小町」④⑦⑧は、朱墨不明の兼宜本も墨筆で記された勅撰集入集歌であった、と考えて大過あるまい。そして、三手本と架蔵本・京女本の両者に共通する祖本の時点で、この5箇所に勅撰集の「集付」が記されていたことが確定するのである。その元来の形態を、架蔵本と京女本は留めているのであり、三手本の朱筆の「集付」である②「拾哀栄花みはてぬ夢」③「同」⑤「拾雑下」は、その後に増補されたのであろう。

尚、⑥「夫木」は、勅撰集ではないので、後日の増補と考えられるが、三手本は異筆による墨書なので、朱筆での増補とは異なる時点で追加されたものであり、先後関係は確定できないが、時期を異にしているとはいえよう。

以上、各節で論じてきたことを踏まえると、京女本は、資経本系統の伝本であると判断されるとともに、架蔵本と親しい関係にあると考えられるのである。

四

最後に、『為頼集』の伝本中で、架蔵本だけが69番歌「はかなくて」と68番歌「またしらぬ」の前後を逆転させた、正しい歌順で書写されている問題について、考えてみたい。

これについては、前稿で、次のように記したことがある。

この歌順の混乱は、早くに生じていたものであり、冷泉家本（『高窠帖』所収の古筆切）の真観書写以前の時点で既に気付かれていて、「はかなくて」歌の詞書「かへし」の下に、「はちすのうたのかへしか本」と記されている。（中略）

その一方で、三手文庫本系統の伝本には、こうした注記は見られず、架蔵本の親本の伝来過程のある時点で、歌順が訂正された可能性も考えられなくはないが、⑥（曽根注＝「津のかみなりし時」）のように三手文庫本の脱字を正しく書写している事例もあるので、元来正当な歌順で書写されていたものと考えておく。（29頁）

今回、京女本を調査していて、第15丁裏に記されている69番歌の詞書「かへし」の「か」の上部から、右上に向けてと、次行の和歌の初句「はかなくて」の「は」の上部から、直前の「かへし」の「か」の上にかけて、それぞれ墨筆による弓なりの線が引かれていることに気付いた。

これは、歌順に混乱があり、この詞書と和歌は、前（第15丁表）

【京都女子大学図書館本・第15丁表】

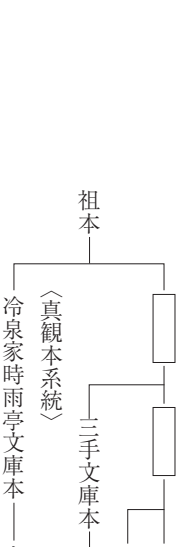
に位置すべきものであるとの、注意を喚起するための処置であるように思われるのだが、墨筆で記されていることから、京女本の時点で新たに書き入れられたものではなく、親本の時点で既にこのように記されていたもののように思われる。

京女本と架蔵本に共通する、正統乃至誤写を遡求し得る本文の事例や、「集付」の一致を勘案する時、両伝本の親本には、京女本のような弓なりの線が引かれていて、それをそのまま忠実に書写したのが京女本であり、架蔵本はその引かれた線の意図を汲んで、69番歌を前に68番歌を後に、歌順を逆転させて書写した、という推定が成立するように思われる。

但し、架蔵本を延宝六年十月十八日に書写した源通規による措置なのか、その親本の時点で既に変更されていたのかは、不明であるが、このことから、架蔵本が京女本の親本である可能性は、否定されるし、京女本の誤写や欠字の異同の事例からは、京女本が架蔵本の親本である可能性も、否定されることになろう。両伝本に先行する伝本の存在が推定されるのである。

以上の検討結果を踏まえると、前稿での系統図は、修正を要することになるので、改めてまとめると、次のようになるように思われる。

【京都女子大学図書館本・第15丁裏】



てこれに依った。

（7）兼宜本の本文と集付については、註（2）前掲拙稿の30～33頁で論じた。

付記　本稿を成すに際して、京都女子大学図書館に複写と書き入れの確認で、御高配を賜りますとともに、複写画像転載と翻刻の御許可を賜りましたことに対して、深謝申し上げます。

（本学名誉教授）

註

（1）筑紫平安文学会著『為頼集全釈』（風間書房　平成六年五月）

（2）拙稿「『為頼集』の伝本・追考」（『花園大学文学部研究紀要』第52号　二〇二〇年三月）

（3）『古筆学大成』第30巻「論文二」（講談社　一九九三年一一月）300頁

（4）註（2）前掲拙稿の23～25頁で、冷泉家時雨亭文庫本（零本）の1～7・24～44・80～86番歌（合計35首）と切り出された48～50・68～71番歌（合計7首）の総計42首について、宮内庁書陵部本との異同を論じた。

（5）『京都女子大学図書館蔵　谷山文庫目録』（京都女子大学図書館　平成二八年一一月後記）

（6）蔵中さやか氏「岩崎美隆旧蔵私家集の検討―関西大学岩崎美隆文庫本『恵慶集』を起点として」（『国文学』第104号　令和二年三月）。本稿中の蔵中氏の論文引用は、全